

乳幼児難聴の取組

令和2年1月27日

静岡県立総合病院

副院長 頭頸部・耳鼻いんこう科 高木 明

音声言語

音声言語の獲得は生来、人間の発達にプログラムされたものであり、単なるコミュニケーション手段と言うだけでなく学習、認知・判断、抽象的概念の構築に不可欠のものであり、社会的情動の根源をなすものである。

それ故、高度聴覚障害であったとしても高性能な補聴器、人工内耳という機器の恩恵で音声言語獲得が劇的に容易になった現在、敢えてそれらの機器を排除して手話を選択する理由はないように思える。

(今日の耳鼻咽喉科・頭頸部外科治療指針 高木 明)

高度難聴児のSmooth な音声言語獲得のために

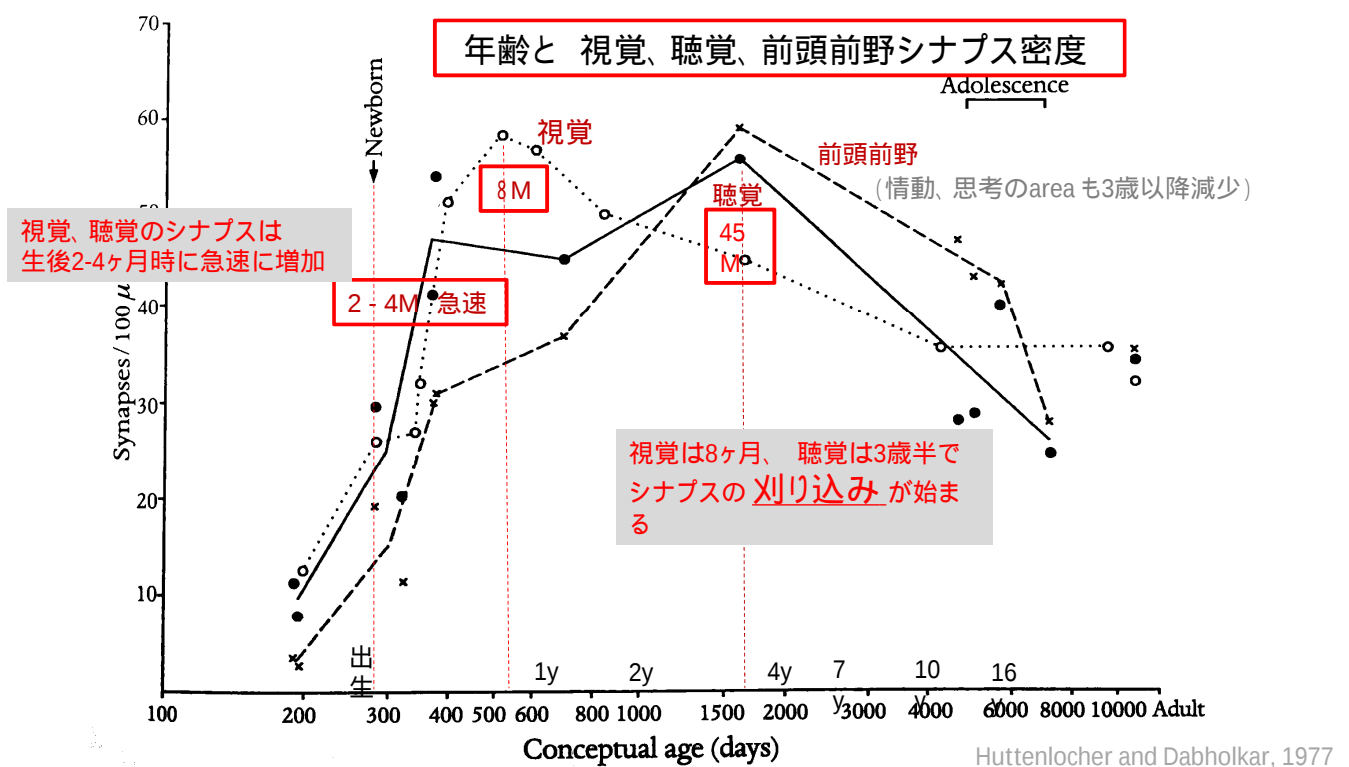
- 障害が障害でなくなる方策 -

難聴早期発見 (新生児聴覚スクリーニング)

早期の適切な介入 (手術、療育(専門家育成))

医学、福祉、教育 の連携 (社会健康医学)

3

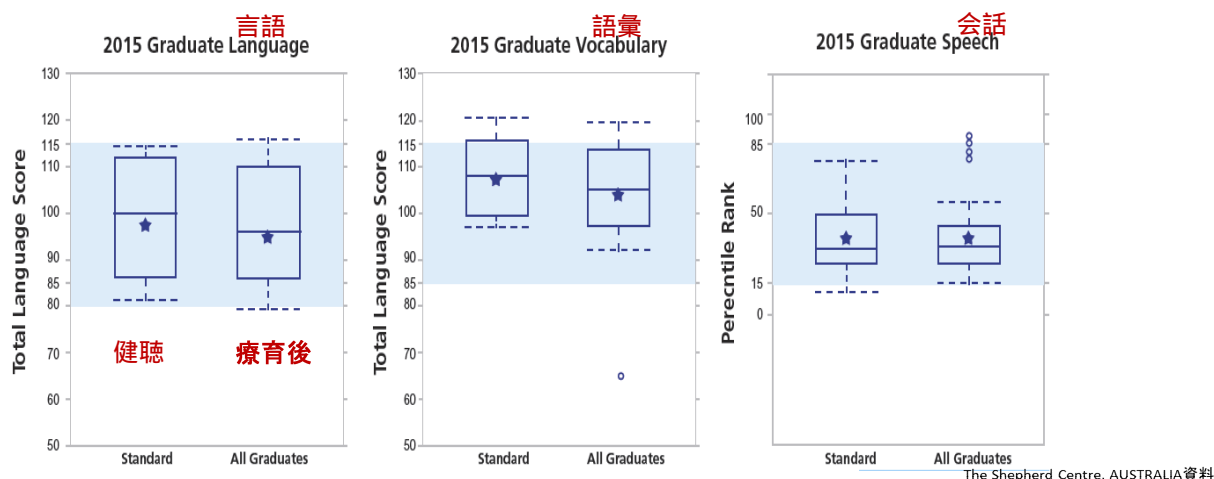


4

Outcomes for children with hearing loss

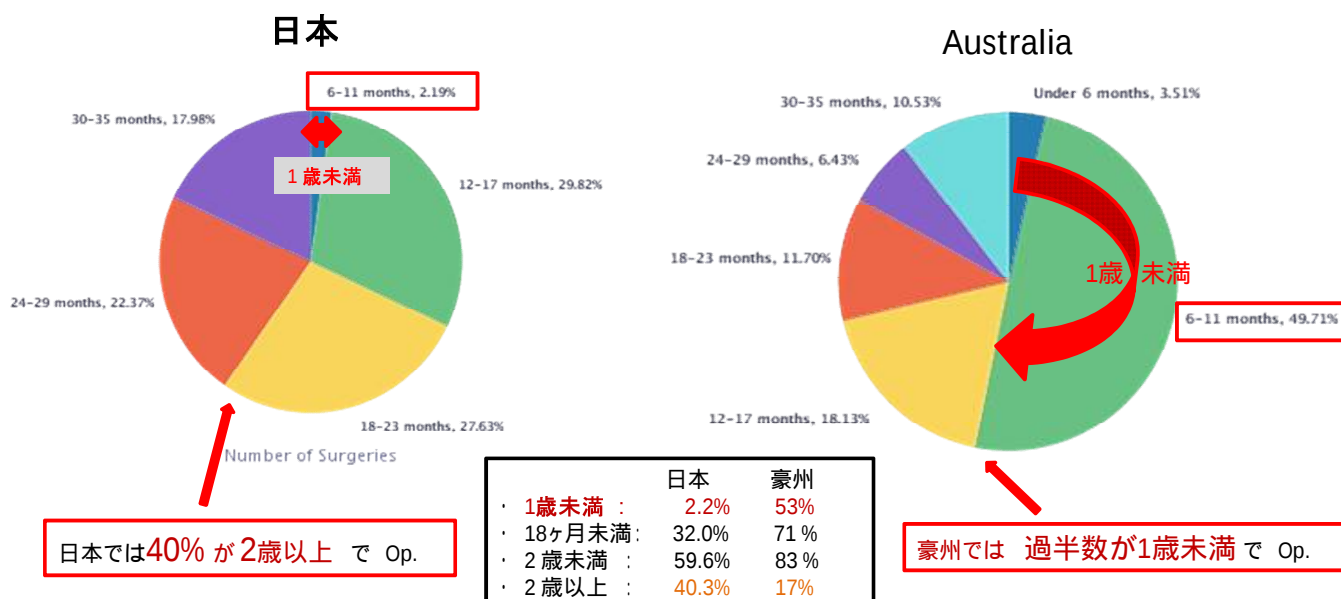
難聴の 早期発見、早期介入で 難聴の程度にかかわらず catch up できる

In 2016, **age appropriate** speech, language and vocabulary skills are possible for children with **any degree of hearing loss** following **early diagnosis, early fitting of technology and early intervention**.



5

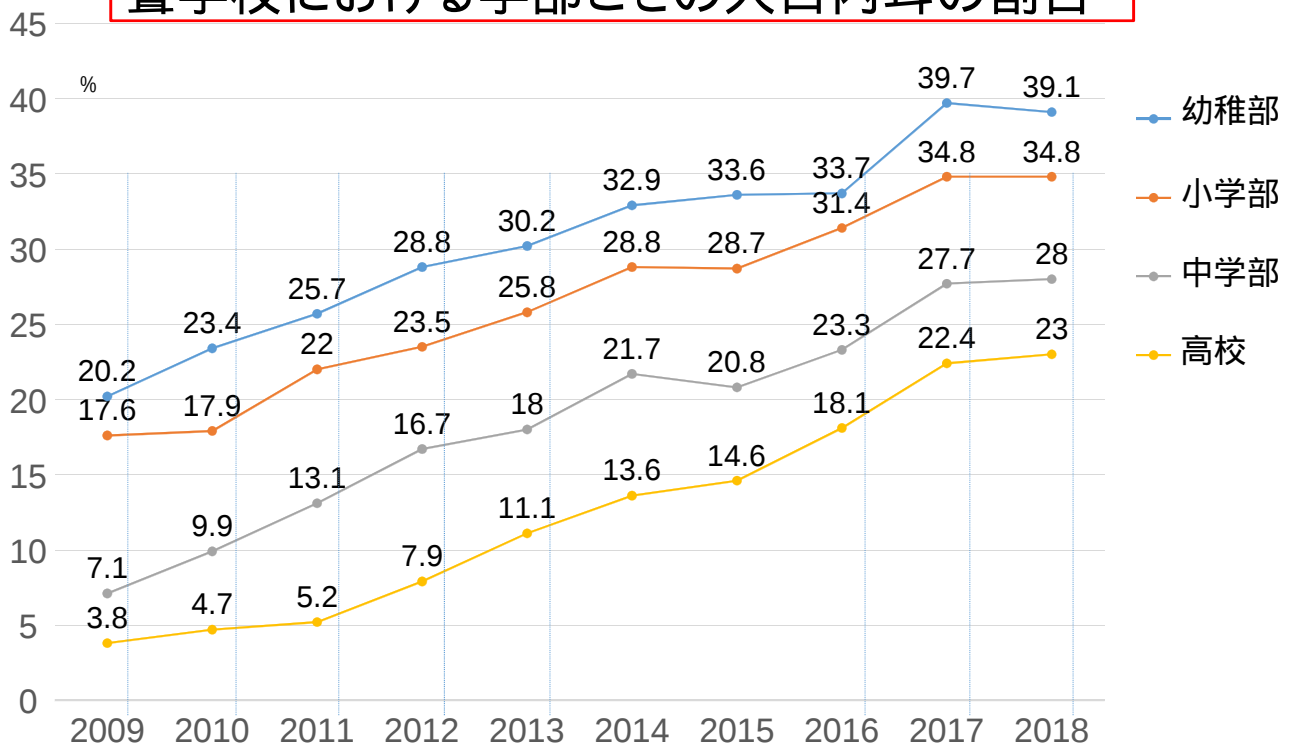
3歳以下での人工内耳手術年齢（日本、豪州比較 2017/7 - 2018/6）



コクレア社 資料

6

聾学校における学部ごとの人口内耳の割合



全国聾学校長会実態調査資料より

7

今後の展望

- (1) 乳幼児の聴覚活用を促すことができる人材の育成
社会健康医学大学院大学に聴覚領域講座設置、
豪州の先進大学と交流
- (2) 音声言語発達の脳科学的探索から介入法を考える
院内リサーチサポートセンターに研究室設置
- (3) 国と連携して難聴児対策を推進
特に、0～3歳の難聴児の療育体制の創設を検討

8